

現代誤訳 百人一首

どんくん

秋の田のかりほの庵のとまをあらみわがころもでは露にぬれつゝ

僕の職場は安普請

雨の雫で

袖が冷たい

春すぎて夏来にけらし白妙のころもほすてふあまのかぐ山

青空と

緑の山を

切り抜いて

風にはためく

白いTシャツ

足引の山鳥の尾のしだりおのながながし夜をひとりかもねん

僕のつままないおしゃべりよりも
ずっとずっと長いこの夜を
あなたもなしで
一人で眠る

田子の浦にうち出してみれば白妙のふじのたかねに雪はふりつゝ

ここからは
富士が見えるね
今もなお
いただきを白く
染める雪たち

おくやまに紅葉踏分なく鹿の声きくときぞあきは悲しき

鹿の音がする

一面の紅葉を踏み分けて

細く切なく

泣く音がする

かさゝぎのわたせる橋にをくしものしろきをみれば夜ぞふけにける

天の川に

かささぎが白い橋を架ける

夜が

じっとりと じっとりと

深くなっていく

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも

天を仰ぐ 天を仰ぐ

いつか見た故郷の月を思いながら

天を仰ぐ 天を仰ぐ

我庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふ也

古く粗末な我が家だけれど

人が言うほど辛くない

見ての通りに

暮らしているさ

花のいろはうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに

あなたを思っているうちに

こんなにも こんなにも切なく

私の上に

時は流れて

これやこの行も帰るも別れてはしるもしらぬも相坂の関

誰もがここで

別れを噛みしめる

過去から未来へ

交差するcrossroad